

日本における「シンデレラ」（灰かぶり）の受容 — 明治期を中心に —

野 口 芳 子

要旨

「シンデレラ」の邦訳は明治期に12話存在する。ペロー版「サンドリヨン」が9話で、グリム版「灰かぶり」が3話である。最大の改変が見られるのは、国語教科書に収録された坪内逍遙著「おしん物語」である。落とすのが靴ではなく、扇になり、その絵柄を当てるのが課題となる。おしんは夕方6時の門限を守れないと思い、園遊会への2回目の参加を辞退する。その殊勝な心掛けが報われて、玉の輿に乗るのである。

教科書や新聞記事ではなく、雑誌や書籍になると改変の度合いが低くなり、原文にかなり忠実な訳も出現する。おすす、^{ふすばり}燻娘、真珠姫といった名前の日本化はあるが、内容の改変は限定的なものである。原典に忠実な訳も出現し、ペロー版では井上寛一訳「^{ふすばり}燻娘」、グリム版では澁江保訳「シンデレラ嬢奇談」がそうである。明治期の邦訳はドイツ語やフランス語の原典からの訳ではなく、すべて英訳からの重訳である。

序論

ディズニー映画や絵本で有名な「シンデレラ」は、グリム童話では「灰かぶり」、ペロー童話では「サンドリヨン」という名称で収録されている。おそらく知らない人はいないほど有名な西洋の「メルヒェン」（昔話）である。その話がどのような形で日本に導入され、紹介されてきたのかについて、明治期に焦点を当てて論じるのがこの論文の目的である。

管見によれば先行研究は9本存在する。明治期の邦訳数は先行研究では10話とされていたが、調査の結果、12話存在することが判明した。先行研究では10話の邦訳内容は、部分的にしか紹介されていない。本論では現在確認されている12話すべての邦訳内容を紹介し、改変点を明らかにし、改変理由について考察していく。また、訳者についても、本名を明らかにし、その実像を明らかにしていきたい。明治期の邦訳版「シンデレラ」（灰かぶり）についての包括的研究は本論が嚆矢といえよう。

明治期の受容について述べる前に、まず、ペロー版「サンドリヨン」とグリム版「灰かぶり」の概要を紹介し、その相違点を明らかにしておく。

第1章 ペロー版「サンドリヨン」とグリム版「灰かぶり」

1. ペロー版「サンドリヨン」の概要

シャルル・ペロー (Charles Perrault, 1628-1703) は 1697 年に『教訓をともなつた昔話』(*Histoires ou Contes du temps passé avec des moralités*) を出版する。そのなかの 6 番目の話が「サンドリヨン」(Cendrillon) である。正式な名称は「サンドリヨン、または小さなガラスの靴」(Cendrillon ou La Petite Pantoufle de Verre) である。

身分の高い父の前妻の娘は、継母と継姉たちに女中のように酷使され、いつも灰まみれなので「サンドリヨン」と呼ばれる。舞踏会にも連れて行ってもらえず、置き去りにされる。名付け親の妖精が現れて杖で南瓜を馬車に、6 匹の十日鼠を馬に、1 匹の溝鼠を御者に、6 匹の蜥蜴を家来に、サンドリヨンを金と銀と宝石で飾られた美しいドレス姿に変身させる。2 日目の舞踏会で王子と踊っていると、約束の 12 時の鐘が鳴り、彼女は慌ててガラスの上靴を片方落とす。城を出ると魔法が解けて粗末な服に戻り、彼女は徒歩で帰宅する。2、3 日後、靴を持って家来が家に来る。靴は小さすぎて継姉たちの足には入らないが、サンドリヨンには合う。皆が驚いていると、妖精が来て杖で彼女に触れる。その途端、彼女の服は素晴らしい服に変わる。王子が探している姫はサンドリヨンであることがわかり、継姉たちは彼女に謝る。サンドリヨンは王子と結婚し、継姉たちにも立派な相手を世話してやる。

教訓：娘にはしとやかさが大切で、出世するには後ろ盾が必要である。

2. グリム版の「灰かぶり」の概要

ヤーコプ・グリム (Jacob Grimm, 1785-1863) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm, 1786-1859) の『子どもと家庭のメルヒェン集』(*Kinder- und Hausmärchen*, 決定版 1857) に「灰かぶり」(Aschenputtel) が収録されている。

実母はいつも空から娘を見守ると言っていて亡くなる。父が再婚し、継母と継姉たちは彼女を女中として扱い、「灰かぶり」と呼ぶ。年の市に行く父親に、彼女は榛はしばみの木の枝を頼み、それを実母の墓に植える。その木に願いごとをすると、白い鳩が現れて叶えてくれる。舞踏会に連れて行ってもらえないときも、榛に頼むと、白い鳩が金銀のドレスや靴を落としてくれる。その姿で城に行くと、王子からダンスを申し込まれる。日暮れまで踊って帰ろうとすると、王子が送るというので、それを振り切るため、彼女は鳩小屋に飛び込む。2 日目も王子が送るというので、振り切るために梨の木に登る。3 日目は夕方に帰ろうとすると、左の靴が脱げてしまう。王子が階段にタールを塗らせたからだ。灰かぶりは片方の靴のまま走って帰宅する。王子が金の靴を持って家に来て、娘たちに靴合わせをする。継姉たちは足が大きすぎるため、継母が踵やつま先を切らせて無理やり靴を履かせる。その姉たちを王子は馬で連れて帰ろうとするが、榛の木の鳩が「靴から血が出ている」ので偽物だと教える。2 人を家に戻して、王子は灰かぶりに靴合わせをする。靴は足にぴたりと合う。彼女の顔を見て、王子は「本当の花嫁だ」と呼び、馬に乗せて城に連れて行く。榛の木の鳩も本物の花嫁と保証する。王子は灰かぶりと結婚式を挙げる。式に付き添っ

た継姉たちは、鳩に目を突かれて盲目になる。

3. ペロー版とグリム版の相違点

1) 相違点の一覧表【表1】

	ペロー版	グリム版
A 実母の臨終の場		母が空から見守る
B 父の身分と再婚	貴族、高慢な女と再婚	金持ち、高慢な女と再婚
C 娘の命名	サンドリヨン (キュサンドロン)	灰かぶり
D 父の土産		榛の枝
E 救済者	妖精 (名付け親)	榛の木と白い鳩
F 馬車、馬、馭者、従僕	南瓜、二十日鼠、溝鼠、蜥蜴を杖で変身させる	
G 服	金糸と銀糸と宝石のドレス	金と銀のドレス
H 靴	ガラスの靴	金の靴
I 門限時間	夜中の12時	なし 夕方に帰宅
J 王子が家まで送る		鳩小屋や梨の木に登り振り切る
K 父親の登場		鳩小屋や梨の木を斧で切る
L 落とす靴の左右	片方 (左右は不明)	左
M タール塗装		王子が命じる
N 靴の持参者	家来	王子
O 靴合わせをする姉たち	入らないのであきらめる	踵やつま先を切って無理に靴を履く
P 間違いを指摘する存在		榛の木の2羽の白鳩
Q 父親のシンデレラ評価		出来損ないの娘と発言
R 彼女を姫と認識する人	家来	王子
S 結婚の相手と得る身分	王子が后にする	王子が后にする
T 姉への態度	悪行を許し、結婚相手を世話する	悪行を裁く 鳩に目を突かせ盲目にする

2) 相違点についてのまとめ

ペロー版では実母の臨終の場面はなく、継母と継姉たちに苛められるところから話が始まる。実子が舞踏会に行けるのは、ペロー版では名付け親の妖精が魔法の杖で変身させてくれるからであるが、グリム版では彼女が父親に頼んで入手した榛の木に願掛けをすると、白い鳩が望みの品を落としてくれるからである。亡き母の守護神に援助を求めているのである。靴の素材はペロー版ではガラスだが¹、グリム版では黄金である。舞踏会の開催はペロー版では夜で、12時の門限

があるが、グリム版では昼間で門限はなく夕方に帰宅する²。グリム版では帰り道では王子を振り切るため、娘は鳩小屋に飛び込んだり、梨の木に登ったりする。

靴合わせのため、ペロー版では家来が町中の家を訪ねるが、グリム版では王子が灰かぶりの家だけ訪ねる。姉たちは足が大きすぎて靴に入らない場合、ペロー版ではあきらめるが、グリム版では踵やつま先を切って無理やり靴を履く。その姉たちを王子は城へ連れて行こうとするが、榛の木の鳥が人違いを指摘し、王子は家に引き返す。他に娘はいないかと聞くと、父親が出来損ないの娘しかいないと答える。王子はその娘にも靴合わせをする。すると靴が足に合い、もう片方の靴まで保持しているので、王子は姫であると確信する。ペロー版では確信するのは家来だが、グリム版では王子自身である。

ペロー版では父親は母親の尻に敷かれているとされており、出現しないが、グリム版では残酷な行為をする父親が出現する³。実子が梨の木に登っているのに、その木を斧で切り倒したり、実子を出来損ないと表現したり、継母と同じ見方を共有する存在として描かれている。

意地悪な継姉たちは、ペロー版では謝罪すると許され、結婚相手まで斡旋してもらうが、グリム版では悪行が罰せられ、鳩に両目を突かれて盲目にされる。ペロー版には勧善懲悪はないが、グリム版には存在する。

第2章 先行研究について

1. 明治期における受容についての先行研究の概観

明治期に邦訳された「シンデレラ」についての先行研究は書誌目録も含めて9本確認できた。それらをまず、発表年順に番号をつけて紹介し、内容がペロー版はP、グリム版はGと略記する。なお、ここで紹介する「シンデレラ」に関する先行研究は、明治期の日本での邦訳に焦点を当てたもののみを対象とする。

2. 明治期における受容に関する先行研究の詳細

1) 1977年 拙著の博士論文 *Rezeption der Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm in Japan* (ドイツ語 博士論文 マールブルク大学) G

1887(明治20)年出版の『西洋古事神仙叢話』に収録された「シンデレラの奇縁」②について、原文との相違点を明らかにし、改変理由について学際的視点から考察している⁴。

2) 1994年 拙著『グリムのメルヒェン—その夢と現実』勁草書房 G

第8章「グリムのメルヒェンの最初の日本語訳『西洋古事神仙叢話』について」で、訳者桐南居士(本名 菅了法)と「シンデレラの奇縁」の訳文について言及し、付属資料3「明治期のグリムのメルヒェンの翻訳年表」の邦訳リストで、4話②③④⑧⁵の書誌が紹介されている⁶。

3) 2000年 川戸道昭/野口芳子/榊原貴教共編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター G

KHM21「灰かぶり」の邦訳5話②③④⑥⑧の書誌が紹介されている⁷。

4) 2003年 舛屋二奈「日本におけるシンデレラの改変—明治期から1960年代までを中心に—」(日本ジェンダー学会誌掲載論文) G

明治期の邦訳5話②③④⑥⑧の書誌と「明治民法」(1898)制定以降、子は親に「従順」であることが重視されたので、「継母」ではなく「継姉」を悪者とする改変が進んだという⁸。

5) 2005年 川戸道昭／榎原貴教共編『児童文学翻訳作品総覧3巻』ナダ出版センターに収録の川戸道昭の論文「明治期の『シンデレラ』と『赤ずきん』」P

イギリスのチェンバース(W. & R. Chambers)の『スタンダード・リーディング・ブックス』(Chamber's Standard Reading Books, 1873)に「シンデレラ」が載っていることを発見し、英語教科書による導入を明らかにしている。それが『国語読本』に題材を提供し、「おしん物語」⑦が収録されることになったという。そこではグリム版「灰かぶり」ではなく、ペロー版「サンドリヨン」が紹介されている⁹。

6) 2005年 同上「目録編 新発掘された『新貞羅(シンデレラ)』」(明治19年訳)全文紹介P
最初の邦訳である新聞記事「新貞羅」①の全文が紹介されている¹⁰。

7) 2005年 同上「目録編 サンドリヨンあるいは小さなガラスの上靴」P

ペロー版シンデレラの邦訳8話(①③⑤⑥⑦⑨⑩⑫)の書誌が紹介されている¹¹。

8) 2005年 川戸道昭／榎原貴教共編『児童文学翻訳作品総覧4巻』ナダ出版センターに収録の「目録編 グリム編 KHM 21『灰かぶり』」G

グリム版の「灰かぶり」の邦訳5話②③④⑥⑧の書誌が紹介されているが、ペロー版と重複しているものが2話③⑥存在する¹²。

9) 2005年 同上 拙論「英訳本から重訳された日本のグリム童話—最初の英訳本を中心に」G

『西洋古事神仙叢話』②の底本がポール訳の英語本であることを探り当て、その理由を詳述している。姉たちが父親に「真珠の首飾り」を頼むのは、ポール訳を踏襲したからである。また、神や悪魔という語が避けられているのは、ポール訳が避けているからである¹³。

第3章 明治期の邦訳について

1. 明治期の邦訳一覧表【表2】

番号	西暦	明治年月日	訳者 筆名 本名	題名 副題	掲載媒体	出版社	底本	紛失物	P G
①	1886	19年12月 29-30日	矢野龍溪 矢野文雄	新貞羅(倫敦の 年始芝居)	郵便報知新聞	郵便報知新聞 社		きぬぢ 絹地の踊沓	P
②	1887	20年44月	桐南居士 菅了法	シンデレラの 奇縁	西洋古事神 仙叢話	集成社	Paull	金銀の踏舞履 おどりくつ	G
③	1891	24年 7月-8月	愛柳子 坂下亀太郎	清き貴女	幼年雑誌 1巻	博文館	Wehnert	がらす ガラスの走靴	P

④	1891	24年8月	幸福散士 澁江保（成善）	シンデレラ嬢 奇談	西洋妖怪綺談	博文館	Wehnert	絹の上靴	G
⑤	1896	29年5月	井上控齋 井上寛一	ふすばり嬢娘	西洋仙郷奇談	東陽堂	Planché.	ガラス スリッパ ガラスの上履	P
⑥	1899	32年8月	白雨楼主人 増田丘一	踊靴 英国お伽噺	少年世界 5巻17号	博文館		びいどろ 硝子の踊靴	P
⑦	1900	33年12月	坪内逍遙	おしん物語	国語読本 上.下	富山房		波に白菊の扇	P
⑧	1909	42年3月	和田垣謙三 / 星野久成 共訳	真珠姫	家庭お伽噺	小川尚栄堂	Wehnert	金の靴	G
⑨	1909	42年4月	雨谷一栄庵 雨谷幹一	出世の靴	世界新おとぎ	成田文永堂 中島辰文館		はり ガラスの上履	P
⑩	1909	42年9月	K. T. 生 高橋一知	モエガラ娘の話	英学界 9月-10月	有楽社		硝子の靴	P
⑪	1909	42年9月	谷東百合雄	シンデレラと 硝子の上靴	初等教育教材 研究 7巻9号	教材研究会		硝子の上靴	P
⑫	1909	42年10月	久保田小塊 文 辻村秋峰 画	シンデレーラ	お伽絵解こど も 6巻7号	児童美育会		上靴	P

2. 明治期の邦訳の内容と邦訳者について

1) ① 1886（明治19）年12月29-30日「新貞羅」（倫敦の年始芝居）矢野龍溪 郵便報知新聞 P

(1) 邦訳の概要

クリスマスから年始にかけてロンドンで演じられた芝居としてシンデレラの話が、「新貞羅」と題して、郵便報知新聞の「倫敦の年始芝居」という項目で、3日間連載で紹介されている。新貞羅に神女が現れ、「日頃の善行を賞し」流行の衣服「真珠の胸飾り金剛石の腕輪」「絹の踊沓」などを櫃から取り出して着替えさせる。新貞羅が目を閉じて再び開けると、夜会会場の宮殿にいる。公子に宿舎を聞かれて「妾は 壽 町一番地に住居し候」と言い、12時前に慌てて立ち去るが、右の踊沓が脱げてしまう。翌日、家来が来て、継姉たちが靴合わせをするが合わず、「下女同様な女子」にも合わせると、「シツクリと適合」する。新貞羅は公子の「貴妃」として宮中に迎えられ、「かの老婆と二人の姉妹ハ羨まし氣に其跡を見送りて佇立み居る」。

(2) 邦訳の分析

ここでは妖精に変身させてもらって馬車で行くのではなく、神女が衣装箱を持参して着替えさせ、目を閉じると会場にいるという設定になっている。南瓜の馬車の出現も魔法の杖も出現しない。ガラスの靴ではなく、絹の踊沓を落とし、家来が町中探し回るのではなく、前もって聞いていた住所、壽町一番地の家にだけ行く。新貞羅は王子の後ではなく、公子の貴妃に任じられる。つまり、正室の後ではなく、一段下の地位の側室「貴妃」として迎えられたのである。

一夫一婦制ではなかった昔の皇室の状況を反映したような邦訳である。新真羅はペロー版のように、いじめられた相手を許して結婚相手まで世話するようなことはしないが、グリム版のように刑罰を与えて盲目にするようなこともしない。

(3) 邦訳の底本 不明である。

(4) 邦訳者

訳者は矢野龍溪であると川戸道昭は推測する。なぜなら矢野は「明治一八年から翌一九年にかけてロンドンに滞在しており、その『年始芝居』を目にするチャンスは十分あった」からである¹⁴。本名は矢野文雄(1851-1931)で、慶応義塾卒業生である。1882(明治15)年1月に『郵便報知新聞』社長に就任し、1897(明治23)年に清国駐劄特命全権公使を務めた後、1924(大正13)年に大阪毎日新聞社副社長に就任する¹⁵。ジャーナリズムと関係が深い人物である。

2)② 1887(明治20)年4月 桐南居士訳「シンデレラの奇縁」『西洋古事神仙叢話』集成社 G

(1) 邦訳の概要

シンデレラの実母は臨終の際、「草葉のかげよりまもる」と遺言して亡くなる。父が後妻をもらい、2人の娘を連れてくる。彼女は「下婢同様」に扱われ、「シンデレラ即ちおすゝ」と呼ばれる。商用で出かける父親に、おすゝは花一枝を頼み、それを母の墓に植えると、白い鳥が来る。城主が宴会を開き、継母と継姉たちは行くが、おすゝは行かせてもらえない。灰の中から麻の実を拾い出す仕事をしたら連れて行くと言われ、白い鳩の援助でやり遂げる。しかし衣装がないという理由で連れて行ってもらえない。おすゝが墓前で泣き、木に願掛けをすると、白い鳩が金銀の舞踏履と錦の小袖を落としてくれる。おすゝが宴会に行くと、人々はその美しさに驚く。おすゝは公子と数曲舞ううちに、「東方白」ちかくになり、隙を見て帰宅する。2日目、おすゝは白い鳩に「花の小袖に玉のくつ」を出してもらい城に行く。案内の人は「おすゝに名をきかんとせしが、[...]これほどの美人は何れ一城の公女に相違あらじ名をきかずとも後に分かるべし」と考えて、聞かない。おすゝは庭から帰ろうとするが、物音に驚いて履の片足が脱げる。拾う間がなく、急いで帰宅する。公子はその履を拾い、家来に国中を廻って履が足に合う女性を探させる。姉たちは踵やつま先を切って履に足を押し込む。使者が連れて帰る途中、白い鳩が履の主ではないと知らせる。使者は家に引き返し、おすゝに履かせると合致したので、この人に違いないと城主に報告する。城主は玉の輿でおすゝを迎えに来る。

(2) 邦訳の分析

実母が臨終の床で実子を見守るのが「天から」ではなく「草葉の陰」と改変されている。‘Ash’を「灰」ではなく「煤」と訳し、「おすゝ」と名付ける。父に持参を頼むのは榛の木ではなく¹⁶、花一枝であり、それを墓前に供える。グリム版では宴会は昼間に開催され彼女は夕方に帰るが、ここでは一晩中開催され「東方白」(明け方)に帰るとされている。おすゝは「花の小袖に玉のくつ」で城にいくが、案内人はおすゝがひとりて来たのを、従者を見失ったと思う。名前を聞かなかったのは、身分の高い人に聞くのは無礼だと判断したからである¹⁷。おすゝが履を落とした

のは物音に驚いたからであり、王子が階段にタールを塗らせたからではない。王子は自ら履に合う女性を探しに行くのではなく、家来に行かせる。白い鳩は家来に忠告して、姉たちが本物ではないことを知らせて本当の持ち主は家にいると言う。白い鳩の活躍が目立つグリム版に基づいた話になっているが、残酷な父親も、タールを塗る姑息な王子も登場せず、継姉たちの悪行に対する報復（眼球除去の刑罰）も削除されている。

それらの改変は底本の英訳本で改変されているものと、訳者の菅によるものに分けられる。ポールの英訳本による改変は、榛（hazel）ではなく小枝（twig）と表記されている点、宴会が昼間ではなく、一晩中（all the evening）開催される点、靴合わせに行くのが王子ではなく家来である点、梨の木を伐る残酷な父親が出現しない点、継姉妹を眼球除去の刑に処さない点などである。

菅による改変は名前が「おすゝ」である点、案内人が失礼だと思ひ名前を聞かない点、王子がタールを塗ったからではなく、物音に驚いて履を落とす点などである。

(3) 邦訳の底本 英訳本 H. B. Paull, *Grimm's Fairy Tales*, London 1868 である。

ポール訳では神（god）や天国（heaven）という表現が避けられ、「神の加護」が「天の助け」になり、母が「天国から見守る」は母が「あなたの守護天使となる」と改変される¹⁸。それゆえ、菅訳では母が「草葉のかげよりまもるそよ」になる。詳細は先行研究9)の拙論に詳述する。

(4) 邦訳者

訳者は桐南居士と記載されているが、本名は菅了法（1857-1936）であり¹⁹、福沢諭吉の門下生である。鳥根県の住職の息子で、西本願寺の奨学金で英国のオックスフォード大学に留学する。帰国後、上京し1890年に第1回衆議院議員選挙に当選する。党派は独立倶楽部である。同年「東洋新報」という新聞社を創刊するが、失敗に終わる。その後、僧侶に戻り、鹿児島県川内市の浄土真宗光栄寺の住職として生涯を終える²⁰。

3) ③ 1891（明治24）年7月17日、8月17日 愛柳子訳「清き貴女」『幼年雑誌』第1巻14.16号 博文館 P

(1) 邦訳の概要

「英国に富貴なる紳士がありました」で始まり、フランスでもドイツでもないイギリスの話として語られる。先妻が死亡し「継室」を迎えるが、傲慢な女で2人の連れ子も「惨酷」である。先妻の子は「清浄で賢い性質」である。継母は可愛くて善良な子を妬み、難儀な仕事を押しつけ、下女として酷使する。実子は石炭の燃殻がある「煙筒」の側に座っていたので、シンドラーと呼ばれる。皇太子殿下が「ボール會（玉突き遊戯法）」を開き、市中の紳士や貴女が招待され、継姉たちも招待される。シンドラーも行きたくて「悲み叫ぶ」と「亡母」が現われ、「神通なる鞭杖」で打つと、南瓜は金飾の馬車に、6匹の二十日鼠は黒馬や馬丁に変身し、シンドラーは金銀の衣服に宝玉の冠をつけた姿に変身する。亡母は「今夜中宵」をすぎると魔法は解けて元の姿に戻ると忠告して送り出す。風采が温雅で綺麗な彼女は、王の宮殿で皇太子のみならずその父母にまで褒められる。彼女は「十二時二十五分」に驚き慌てて帰る。亡母は約束を守ったと喜ぶ。

2回目のボール会では楽しくて時の経つのを忘れ、十二時の鐘が鳴る。シンドラーは慌てて蝶や鳥のように素早く立ち去るが、宮殿の外に出たときには魔法は解けて、元の「卑しき小娘」の姿に戻ってしまう。皇子は彼女が遺した「玻璃製の走り靴半足」を全国の美人貴女に試させることにし、最後に卑しきシンドラーが試すと、その足は「格好よく靴に嵌り」、皇子始め人々は非常に驚く。シンドラーがもう片方の靴を取り出すと、彼女は「美麗なる貴女」に変わり、皇子は喜び直ちに彼女を妃に迎える。ふたりの姉妹は、その罪を詫びて善人となる。「人は常に正直にあれば神必ず之れを守る。諸君合點？合點？」

(2) 邦訳の分析

ペロー版に基づいた内容であるが、変身させてくれるのが「妖精」ではなく「亡母」である点のみ、グリム版の亡き母の「守護神」と重なり合う。誤訳と思われる箇所が2点ある。1点目は「舞踏会」ではなく、「ボール会(玉突き遊戯)」と訳されていることである。英語(ball)やドイツ語(Ball)には「舞踏会」という意味と「ボール」という2種類の意味が存在する。それゆえ、取り違えたのであろう。フランス語では舞踏会はbalで、ボールはballeと書くが、発音は同じである。それ以前の英訳では、①では夜会、②では宴会とほぼ正確に訳されている。2点目は「今夜中宵」までに帰宅するようという約束を守ったとされている1日目が、「十二時二十五分」に城を出ているとされていることである。2日目は「十二時」の鐘が鳴ると同時に城を出ると門の外で魔法が解けてしまう。したがって、1日目の表記は「十一時二十五分」の誤記であろう。また、教訓として書かれている「人は常に正直にあれば神必ず之れを守る」という教えも適切でないように思われる。シンドラーが幸運を勝ち取ったのは正直であったからではない。彼女は留守番をすと言ってしなかったのが正直ではない。教訓を書くとするれば、「自らに対する不当な扱いに文句も言わず、忍耐強く耐え、常に勤勉に働いたから」であろう。

(3) 底本 不明である。

(4) 邦訳者

訳者は愛柳子で、本名は坂下龜太郎(1870-1907)である。博文館で『幼年雑誌』の主筆を務めてから²¹、巖谷小波の部下として『少年世界』の編集に従事する。小学生向けの読本『絵入幼年読本』や『絵入幼年歴史』などの文系の著書だけでなく、『絵入理科読本』や『簡易物理学』などの理系の著書も多く、両分野に造詣が深い人物だったと思われる。37歳という若さで夭折したためか、坂下については新潟県出身ということ以外²²、学歴や経歴についての詳細は不明だ。

坂下はこの話をおそらく英語版から重訳したのであろう。なぜなら、彼はグリム童話ルンペルシュティルツヒェンも英語訳から重訳しているからである²³。フランス語のペロー童話の英語訳による重訳と思われるが、底本は不明である。原文の内容からかなりかけ離れた内容の訳文なので、底本による影響よりも、坂下本人による改変が多いのではないかと推測する。

4)④ 1891(明治24)年8月6日 幸福散史 澁江保訳「シンデレラ嬢奇談」(即ち泰西皿々奇談)『西洋妖怪奇談』小学講話材料 博文館 G

(1) 邦訳の概要

ある富豪の細君が臨終の際に、「草葉の蔭より汝の守護」となると言って他界する。実子は「麵包」を食べたかったら働けと言われ、綿服と木履に換えられ、下婢として酷使される。継姉妹の紅皿菊皿は、実子欠皿を灰塵にまみれているのでシンドレラと呼ぶ。父が定期市に行くとき、欠皿は「貴体に觸れし樹枝」を所望する。彼女は父の「其帽に觸れし」「榛枝」²⁴を母の墓に植えて「毎日三回づつ」墓参りする。彼女が泣くと、白い小鳥が現われて、望みの品を落としてくれる。国王が3日間の大饗宴を開き、国内の「あらゆる美少娘」を招集し、皇太子の妃を選ぼうとする。紅皿菊皿はシンドレラを使って身を飾る。シンドレラは行かせてくれるよう継母に頼むが、豆拾いの難題を課される。墓前の鳩に助けを求めると、難題を解決してくれるが、行かせてもらえない。墓の榛の木の下で、「妾の爲めに金銀を振出し給へ」と言うと、白い鳥が金銀の衣服と銀飾のある絹製の靴を持参する。それを身に着けてシンドレラは宴席に出る。皇太子が来て、彼女の手を取り共に踊る。黄昏まで踊って疲れたので、彼女は暇乞いをする。皇太子は送ると言って同行するが、彼女は振り切るため鳩小屋に飛び込む。皇太子が彼女の父親に言うと、父は斧で鳩小屋を壊すが、中には誰もいない。

2日目にはシンドレラは前より美しい服を着て宴会に行く。日が暮れたのでシンドレラが暇乞いをする、皇太子がまた同行する。彼女は「真珠」が実る木に登って振り切ろうとする。皇太子が彼女の父に事情を話すと、父は斧でその木を切り倒す。しかし、そこには誰もいない。

3日目にはシンドレラはさらに美しい衣服と純金の上靴を身に着けて宴会に行く。日が沈み、暇乞いをする、彼女は左の靴を落としてしまう²⁵。皇太子が「途上一圓に瀝青」を敷いたからである。皇太子はその靴を持ってシンドレラの父親の家に来る。紅皿菊皿は足が大きすぎたが、母親の助言に従って、紅皿は足趾を菊皿は踵を切り取って、無理やり靴に押し込む。皇太子は紅皿を妃と信じて馬に載せて連れて行くが、墓前の小鳩が出血を指摘して偽物だと知らせる。菊皿も同じ経緯をたどり、皇太子は家に引き返す。父親が先妻の子である欠皿は、「醜く汚れたれば」^{おめどほり}顔させられないという。皇太子が執拗に懇願するので、欠皿は靴合わせを許される。足が靴に合致し、皇太子は「コレゾ我が舞踏会に共に舞踏せし佳人なり」と叫ぶ。紅皿菊皿は「之を見て驚愕と憤怒とに堪えず。」太子が欠皿を馬に乗せ、例の墓前を通ると、2羽の小鳥は「靴上に血なし」「君の真正なる新婦なり」と保証して、シンドレラの肩に棲まる。「太子と欠皿嬢とは、芽出たく盛大なる結婚式を行ひ、又彼の紅皿菊皿の二婦は悪事の罰として、盲となれりと云ふ。」

(2) 邦訳の分析

グリム版の内容とほぼ一致する訳文である。欠皿、紅皿、菊皿という名の付与は訳者による加筆であるが、話の内容はグリム版を忠実に踏襲したものである。父親の残酷さも削除されずに記載されているが、「出来損ない」という表現は和らげられ、「醜く汚れた」（底本：too dirty）と改変されている。結婚式の最中に鳥に目を突かれて継姉妹が盲目にされるという表現はなく、その後罰として盲目されたという表現に留められている²⁶。これらの改変は底本のウェーナート版（Edward Henry Wehnert, 1831-1868）の英訳²⁷でなされたものと同じである。

グリム兄弟は初版にはなかったのに、第2版から継姉たちへの「眼球除去の刑」を加筆する²⁸。姉たちの目が抉り取られるのは、彼女たちが悪い心をもっていたからだ。目は心の窓で悪心は目に現れる。その目を除去すれば悪心も除去されると考えたのであろう。灰かぶりの願いをかなえる鳩がそれを実行したということは、これは天罰ではなく、彼女の復讐だったのである。西洋中世では不当な扱いを受けた場合、相手に報復しなければ自分の名誉が回復しない。慣習法を熟知しているグリム兄弟は、それゆえ、第2版から「眼球除去の刑」を挿入したと推測する²⁹。

この場面は残酷だと考えて削除されることが多いが、澁江は削除せず入れている。ただし、シンデレラではなく、神による制裁であるかのような表現に和らげられている。一方、父親が実の娘に残酷な行為や言動をする場面は削除されずに訳されている。西口拓子もウェーナート版の英訳本を底本としているが³⁰、そこでもこの箇所は緩和された表現「彼女たちの悪行が罰せられて盲目にされた」(with blindness as a punishment for their wickedness)とされている。②の菅訳では、底本のポール訳でこの部分は削除されているので、鳩による制裁も残酷な父の言動もない。それらの訳と比較すると、澁谷訳は比較的原文に添った訳であるといえる。ただし誤訳も存在する。「梨」の木を「真珠」の木と訳しているのである。英語の梨(pear)と真珠(pearl)のスペルが似ているので、取り違えたのであろうか、それとも使用した底本に印刷ミスがあり、最後のエル「1」のスペルが抜け落ちるか、判読不明だったのであろうか。

題名に添えられている「即ち泰西皿々奇談」は、日本昔話の継子いじめの類話である。「糠福米福」「紅皿欠皿」「皿皿山」など、美しくて勤勉な実子が、後妻とその連れ子の妹に苛められる話である。最後には、実子は高貴な人と結婚し幸せになる³¹。

(3) 底本

西口拓子はこの訳の底本はウェーナート版であると推測している。理由は上記の緩和された制裁の英文である³²。Edward Henry Wehnert (1831-1868), Grimm's Fairy Tales. Being the Household Stories Collected by the Brothers Grimm. With two hundred Illustrations by E. H. Wehnert. London, New York 1890.

(4) 邦訳者

訳者は幸福散史または澁江保で、本名を澁江成善^{しげよし}(1857-1930)という。澁江抽斎の七男で高等師範学校および慶応義塾を卒業後、1881年から浜松中学校教頭、愛知中学校長を経て慶応義塾の教師となる。保が上京を決意した理由は英学の勉強である。福沢諭吉の『西洋事情』に触発されたからだという。1890年から博文館のために多数の著作や翻訳を手がける³³。1891年のこの訳は、博文館入社後すぐに手掛けた仕事である。その後、翻訳や著述業に専念する。

5) ⑤ 1896 (明治 29) 年 5 月 井上控齋訳 矢野龍溪補修 山本昇雲画「^{ふすぼり}燻娘」『^{せんきょうきだん}西洋仙郷奇談』東陽堂 P

(1) 邦訳の概要

ある男の女房が亡くなり、後妻に2人の娘がいる女をもらう。最初だけ実子をかわいがる

が、次第に虐待し、女中として酷使用する。「萬只母次第」である父に訴えても仕方ないので、諦めて継母に従う。「灰爐」の中で寝るので、「燻娘」と呼ばれる。あるとき、この国の公子が「舞踏會」を開くので、あらゆる淑女紳士が招かれる。継姉たちも招待され準備に余念がない。彼女たちを見送ってから燻娘が泣いていると、仙女が現われる。仙女が鞭打つと、南瓜を金の馬車に、二十日鼠6匹を馬に、大鼠を御者に、6匹の蜥蜴を従者に、燻娘を「金銀宝玉の美服」や「玻璃の上履」を身に着けた姿に変身させてくれる。12時までに戻ることを約束させて舞踏会に行かせてくれる。彼女が城に現れると、全員静まり返る。公達は彼女とだけ躍り、12時近くになる。彼女は暇乞いの挨拶をして立ち去る。2日目は12時の鐘が鳴り始めてから、慌てて立ち去ったので、馬車も馬も消えてしまっていた。公達は庭の片隅に「玻璃の上履」が片方落ちているのを見つける。その履を持参して家来が各家を回り、娘たちの足に合わせる。継姉たちには合わなかったが、燻娘が履に足を入れるとぴたりと合う。皆が驚くなか、もう片方の履を彼女が取り出す。仙女が現われて仙鞭で娘の衣装に触れる。その途端美しい服となり舞踏会に現れた姫であることが判明する。すぐ城に連れて行くと、公達は大喜びで「盛大なる典儀もて愛度之を娶りけり」。燻娘は父母に「莊麗な邸宅」を与え、姉妹を宮中に迎え「大諸侯」に嫁がせてやる。皆、感激して悪心を改めて善人になったという。

容姿の美しさも大切だが、より大切なのは心様の優れていることである。燻娘はこの両方を持っていたからこそ、「末は榮華の身と為りし」と解説されている。

(2) 邦訳の分析

ペローの原文にかなり忠実な訳で、和漢混用文で書き、漢字に振り仮名を付けている。妖精(fee)を仙女に、王子(prince)を公達と表現している。舞踏会(ball)は正しく訳されているが、邦訳②では王子なのにここでは公達とされているなど、できるだけ日本文化圏の表現に置き換えようとしている。燻娘は父母に「壯麗な邸宅」を与えるという表現は、ペローの原典にも底本であるプランチェ(James Robinson Planché, 1796-1880)の英訳にもない。おそらく、シンデレラは「継姉たちに宮中に住居を用意した」(gave her sisters apartments in the palace)という表現を、井上が両親に変えたのであろう。すぐ結婚する継姉たちに住居(apartments)など必要なく、両親用の住居こそ必要であると考えたからであろう。

なお「結婚式」という言葉を使わず、「盛大なる典儀もて愛度之を娶りけり」という表現には、男性側からの視点しか感じられない。この話の主人公は公達ではなく燻娘である。その点を考えれば、女性の側に立った表現か、せめて両者の側に立った表現「婚礼の儀」にすべきであろう。男性だけでなく、女性も読者として視野に入れた本の提供を唱える矢野の方針に矛盾するのではないか。

最後に教訓と明記はされていないが、立身出世するのに必要なことは「心様の優れている」ことだと解説されている。底本であるプランチェの英訳本では'amiability'と書かれており、「気だての優しさ、温和さ、愛想のよさ、上品さ」などの意味がある。そのなかで井上は「心様が優れている」つまり「心根が優しい」という意味を採用した。しかし昭和時代には、新倉朗子は「善

意」、今野一雄は「しとやかさ」と訳している³⁴。17世紀末のロココ時代のフランス語 'grâce' は、英語 'grace' と同じで「しとやかさ」「優雅さ」を意味する。王家の嫁として必要な要素は「上品さ」や「優雅さ」であるとペローは考えていたと思われる。フランス語から英訳されるときプランチェは、'grace' ではなく 'amiability' という語を採用したので、「親切さ」という邦訳が出現したのであろう。

(3) 底本

岡田知子の先行研究によると、底本はプランチェの英訳本 (Four and Twenty Fairy Tales. Translated by James Robinson Planché. London, Routledge 1858) であるという³⁵。岡田は「眠れる森の美女」の井上訳「睡美人」を分析した結果、上記の結論に達した³⁶。補修者矢野龍溪がイギリスに留学した1868年に、1858年に出版されたプランチェの本を購入した可能性は低くないと岡田は推測する³⁷。

(4) 邦訳者

井上寛一は菅了法と同時期に慶應義塾を卒業し、いずれも矢野龍溪の門下生であり、「矢野が着手した『フェアリーテイルズ』の翻訳を、菅了法が受け継ぎ、さらに井上がそれを発展させていく。日本における『フェアリーテイルズ』の紹介は、この三人の慶應義塾出身者の手によって整えられていく」と川戸道昭は主張する³⁸。井上は改進黨の演説にも参加し、1898-1899 (明治21-22)年に『内外百事便覧』というデータブックのような本を矢野龍溪と共著で出版している³⁹。

「燻娘」には山本昇雲 (1870-1965) による日本風の挿絵が見開きで1枚入れられている。着物姿だが首や手に装飾品をつけた燻娘が宴会から帰宅の際、履を落とす場面が描かれている。異国の物語に和洋折衷の装いをした燻娘の姿は独特な雰囲気醸し出し、印象に残る絵である。

6) ⑥ 1899年 (明治32)年8月 白雨楼主人 (増田丘一)「英国お伽噺 踊靴」『少年世界5 (17)』博文館 P

(1) 邦訳の概要

英国の町に美しい娘が住んでいた。親孝行で有名であったが、母親が風邪で死んでしまう。父親は2度目の嫁をもらう。後妻には連れ子が1人いる。いつも意地悪をするので、娘は泣き暮らす。ある日、王から今夜踊りの催しをするので来るようにという知らせが届く。連れ子の姉と継母は行くが、娘は衣装がないから行けない。娘が泣いていると、女神が現われて鞭を当てると、南瓜は馬車に変身し、娘の衣装は見事な着物に変わる。6匹のねずみを4匹の馬と2人の馭者に変身させ、「甘藷」を土産物にして、娘を御所に行かせる。女神は12時までに帰宅するよう忠告する。1日目は12時までに帰宅するが、2日目は12時の鐘が鳴ってから御所を飛び出し、「硝子の踊靴」を落としてしまう。王が拾いあげ、この靴の履き手を后にするという。それを聞いて英国中の娘が御所に押しかけ靴を試すが、華奢な足を持つ者は誰もいない。なかには足の肉を切り取って履こうとする者もいた。連れ子の娘もそのひとりであった。孝行娘が汚い服で来ると、王は服が汚いので靴を履くのを許可しない。娘が履くと合致したので、王は驚き不審がる。そこに女神

が現われ、鞭を娘の着物に当てると、昨夜通りの美しい着物になる。王はようやく思い出し、あの時の美しい娘だとわかり手を取る。「目出度此娘はお后になりましたとさめでたし、／＼(完)」で終わる。

(2) 邦訳の分析

王の踊りの会にいくのに、「甘藷」を手土産として持参するという、日本の慣習に合わせた改変を行っている。ペロー版でもグリム版でも土産の持参はない。開催場所は御所で城ではない。ガラスの靴を「硝子の踊靴」とルビを打っているところに時代を感じる。ピードロとは室町時代末にポルトガルやオランダから長崎にもたらされた舶来のガラス器の呼称で、明治から大正初期まで用いられていた言葉である⁴⁰。主としてペロー版を踏襲したものだが、グリム版のエピソードも混入されている。足の肉を切り取って履く者もいたというエピソードと、家来ではなく王自らが靴合わせに出かけるという表現である。王は服が汚いので靴を履くことを許さないという表現は、グリム版にもペロー版にもない。訳者である増田の改変というより、底本である英訳本での改変である可能性が高い。

(3) 底本 不明である。

(4) 邦訳者

訳者白雨楼主人は増田丘一の筆名である⁴¹。増田丘一は医者で、『きむすめ論』『現代名醫棚卸し』『今のお医者』『お医者論』『細君論』などを1913年（大正2）年に著した人である⁴²。増田丘一は精神医学に関する著書が多いので、精神科医であると推測するが、詳細については不明である。

『踊靴』はペロー版に基づいたものであるが、グリム版の内容も混入させているのは、おそらく使用した英訳の底本の影響であろう。巖谷小波が編集する雑誌『少年世界』に増田が投稿しているのは、おそらく、医学を志した経験がある小波との繋がりからであろう。

7) ⑦ 1900（明治33）年12月30日 坪内逍遙著「おしん物語」『国語読本』高等小学校用巻一 富山房 P

(1) 邦訳の概要

おしんは商家の娘で10歳のとき、実の母と死別する。後の母は善くない人で、おこまという連れ子と一緒に、父が留守になるとおしんをいじめ、下女のように酷使する。あるとき、華族の別邸で「園遊會」があり、おしんの家にも案内状が来る。母はおこまに反物を買ひ、3日の間に縫い上げるようおしんに命じる。おしんが縫い上げた着物を着て、おこまは母親と「園遊會」に行く。おしんが台所でしょんぼりしていると、一尺程の小さな「辨天様」が現れて、「園遊會」に行かせてやるという。扇で炭取りを叩くと馬車になり、鼠を叩くと馬になり、猫を叩くと馭者になる。おしんの着物を叩くと、絹の着物になり、帯を叩くと緞子になる。夕方の6時には帰るようと言って、扇を渡しておしんを馬車に乗せる。おしんは6時になるまでに帰ろうするが、引き止められて、扇を置き忘れる。翌日、また「辨天様」が現れて、「園遊會」に行かせてやるというが、おしんは断る。理由はおこまが悔しがるからと、6時には帰れないと思うからであ

る。「辨天様」は感心して、それでは今日はやめなさい。その代わり、褒美をやりましようと言って消える。「園遊會」では彼女が来ないので客も主人も失望し、忘れ物の扇を持って、町中を訪ね歩く。扇の絵柄を当てた者を当家の若奥様にすると布告する。おしんが汚い身なりのまま、波に白菊の模様だと当てる。家来は驚いておしんを見る。着物は汚いが、品格と様子から令嬢に相違ないと思い、戻ってそう伝える。すぐに縁談が決まり、おしんは華族へ嫁入りすることになる。おしんはほろから綾錦を着る身になり、「その錦は六時を過ぎてても、翌日になっても、ほろにかへらぬ綾錦。これが日ごろの心懸けのよい報いであった。」

(2) 邦訳の分析

言文一致を唱えた坪内逍遙の文だけあって、文体は平易で読みやすい。国語教科書に掲載された話であるからか、外国の話が日本の話であるかのように改変されている。シンデレラはおしんに、妖精は弁天様に、城が華族の別邸に、舞踏会が園遊会に、南瓜が炭取りに、変身させる道具は杖から扇に、金銀の服は絹の着物と緞子の帯に、門限は夜中12時から夕方6時に、落とすのはガラスの靴から「波に白菊の絵柄」の扇に、若殿が気に入った理由が美しいからではなく立ち居振る舞いや言葉遣いが上品だからに、「園遊會」に行くのは2回ではなく1回に、改変されている。おしんが華族の嫁になることができるのは、家族への思いやりと、門限を守れないという危惧から園遊会行きを辞退するから、つまり、殊勝な心掛けが報われたからなのである。

(3) 底本 不明である。

(4) 邦訳者

訳者坪内逍遙は本名を坪内雄蔵(1859-1935)という。東京帝国大学文学部政治経済学科を卒業後、早稲田大学の講師から教授になる。『小説神髓』で小説の改良を呼びかけ、近代日本文学の指導者となる。シェイクスピア研究や翻訳と同時に近松門左衛門の研究もした人物である⁴³。

8) ⑧ 1909 (明治42)年3月 和田垣謙三／星野久成共訳「真珠姫」『グリム原著 家庭お伽噺』小川尚栄堂 G

(1) 邦訳の概要

「或る豪い方」と奥方との間の娘、真珠姫は花よりも美しくて大切に育てられていた。「姫十七八の頃」、母が病気で亡くなり、別の奥様が迎えらる。2人の娘を連れてきた奥様は、真珠姫を継子扱いにして下女同様の待遇にする。真珠姫が母の墓に手を合わせると、いつも2羽の白い鳩が来て、見守ってくれる。王が天下の美人を集めて舞踏会を開き、王子の花嫁を選ぶという。各地から着飾った人が押しかけ、真珠姫も行ったかったが、継母に仕事を命じられて行けない。母の墓前で真珠の様な涙を流して泣いていると、2羽の白鳩が金の上靴と金銀宝石を織り込んだ衣装を落としてくれる。娘はそれを身に着けて王城へ行く。王子は彼女の手を取り舞踏をする。日が暮れかかると、真珠姫は王子に暇乞いをするが、許してもらえない。真珠姫は「王子の手を振り離して、お庭に飛び下り、息をきつて逃げだし」たので、金の靴を片方、庭に落としてしまう。翌日、王子は舞踏会に参加している女性たちに靴合わせをするが、「誰一人」合わない。

真珠姫はその日御殿に来ていなかったもので、継姉たちが試すことになる。彼女たちはこっそり足の指を切って靴に入れようとしたが、「血がだらだら垂れたので、すつかり悪事が露見して」しまう。他に娘を持っている者はいないかと聞くと、継母はひとりいるがお目通りできるような娘ではないと答える。王は使いをやり真珠姫を呼び寄せる。娘は汚い衣服のまま御前に出るが、王子は一目で彼女だと気がつく。靴を履かせると「しっくり」合ったので、すぐに「真珠姫を花嫁にとりたて、盛んな御婚礼の式をあげることに」なる。王子が姫と馬に乗って、遊山に出かけると、2羽の白鳩が飛んで来て、姫の両肩に止まり、姫の幸福を祝う。

「解説」「この継母とその連娘のやうに根けた料見を持って居る者は、いくら巧んでも立派な者になれません、又気立の優しい真珠姫のやうな方は、いくら他人に邪魔をされても、一時難儀をしても、末には立派な身分に出世することが出来るのは、全く天のお助けがあるからです。それゆへ人は目前の難儀を悲んでばかり居ずに、正しい心掛を持ってさへ居れば、必ず終に幸福が運つて来ます。」

(2) 邦訳の分析

グリム原著と明記された本であるのに、「真珠姫」は「灰かぶり」の話を忠実に訳出したものではなく、大幅に改変されたものである。父親に土産に持参するように頼む榛の枝のモチーフは削除され、墓にいる2羽の白鳩のみが奇跡をもたらす存在として出現する。グリム版では舞踏会は3回開催されるが、ここでは1回である。夜中の12時ではなく、日暮れに帰るのはグリム版と同じだが、靴が脱げる理由が、王子がタールを階段に塗ったからではなく、真珠姫が王子の手を振り切り、庭に飛び下りたからである。王子は昨日拾った金の靴を出して、舞踏会に来た女たちに履かせる。「これにしつくりとあう女を花嫁にとりたてる」と言って、順々に試させるが、誰も合わない。2人の継娘は足の指を切って履こうとしたが、血が流れたので偽物だとばれてしまう。さらに、鳩小屋を叩き割ったり、梨の木を伐ったりする残酷な父親の出現もない。結婚式の際、姫の両肩に2羽の白鳩が止まり、2人の継姉の両目を突いて盲目するという眼球除去の刑罰を科すというグリム版の表現は、ここでは完全に削除されている。底本であるウェーナート版の和らげられた表現、2人の継姉はその悪事が罰せられて盲目になったという表現すらない。

解説として意地悪な人は罰せられ、優しい人は出世して報われるので、正しい心を持つようにという教訓のようなものが加筆されている。

(3) 底本

西口が挿絵から調査したところによると、和田垣が使用した英訳本は下記の本だという⁴⁴。

Grimm's Fairy Tales. Being the Household Stories Collected by the Brothers Grimm. With two hundred Illustrations by E.H. Wehnert. London George Routledge & Sons. New York: E.P. Dutton and Co.1890. しかし、ここで紹介された話は、底本に基づいた忠実な訳ではなく、大幅に改変した翻案のようはものである。

(4) 邦訳者

訳者和田垣健三（1860-1919）は東京帝国大学の経済学の教授で英文学者でもあり、1880年か

ら 1884 年までケンブリッジ大学とベルリン大学に留学した経験を持つ英語とドイツ語に堪能な学者である⁴⁵。星野久成は『英文法と作文』(1903)の著者である。2人の共著ということは、この本はドイツ語ではなく英語からの重訳と判断してよいだろう。

9) ⑨ 1909 (明治 42) 年 4 月 雨谷幹一訳「出世の靴」『世界新おとぎ』 成田文永堂 中島辰文館 P

(1) 邦訳の概要

夫婦の間にシンデレラという可愛らしい娘がいた。母親が亡くなり、父は後妻をもらう。継母は2人の連れ子と一緒に、出来が良くて器量の良いシンデレラを苛める。煙突の傍にいたので「臺所娘」と呼ばれる。王が夜会に招待してくれるが、シンデレラは行けない。泣いていると女神が現われて、冬瓜を持ってくるように言う。女神が「黄金の寶棒」で叩くと、冬瓜は「薔薇色の天鵝絨」の馬車に、6匹の二十日鼠は黒馬に、1匹の黒鼠は御者に、6匹の蛇は馬丁に変身する。シンデレラも金糸と玉の美しい着物、絹の足袋と琉璃の上靴という姿に変身させてもらう。魔法が解けるから、12時までには必ず帰るように忠告される。美しい姫が来ることを王子は知っていて、入り口で待っている。馬車から降りたシンデレラを王子が降ろし、手を取って宴会へと導き、共に語ったり踊ったりする。時計が鳴り、11時半だったので、皆に挨拶してシンデレラは立ち去る。2日目はあまり楽しくて時を忘れ、時計が12時を打ち始めたので、脱兎の勢いで彼女は会場を飛び出す。王子は道端に小さな美しい琉璃の上靴が片方落ちているのを見つける。数日後、靴合わせの使者が町中を回り、彼女の家にも来る。継姉たちには靴は合わず、シンデレラが試すとうまく合う。もう片方の靴も取り出して立ち上がるとボロが金蘭の着物になり、あたりに光が射す。夜会の時のように美しい姫になっていたので、継姉たちはシンデレラの足元に身を投げ出し、今までの意地悪を詫げる。シンデレラは継姉たちを許す。使者はシンデレラを宮中に連れて行く。翌日、王子はシンデレラと結婚式を挙げる。

(2) 邦訳の分析

雨谷はシンデレラを正式な名と考え、「臺所娘」とあだ名をつけている。「燃えかす」という意味の英語「シンダー (cinder)」からついたあだ名とは思わなかったのだろうか。南瓜が冬瓜に、蜥蜴が蛇に改変されている。彼女が来ることを王子が初回から知っており、入り口で待っているという改変は初めてである。シンデレラがガラスの靴を両足に履いて立ち上がると、彼女の服や姿は夜会の時のように美しくなる。女神が現われず光が差すと美しくなるという改変も独自のものである。謝る継姉たちを許す点はペロー版を踏襲しているが、城に呼び寄せて結婚相手を斡旋するエピソードは省略されている。皇子や公子ではなく、王子とされているが、夜会開催場所は城ではなく、宮中である。シンデレラは洋服ではなく、金糸と玉の絹の着物、絹の足袋と琉璃の上靴という和洋折衷の姿で描かれている。

(3) 底本 不明である。

(4) 邦訳者

訳者雨谷幹一（生没年不明）は雨谷一葉庵、菜花庵、大原東野、桜葉山人など様々な筆名を用いて執筆活動をしている人物である。学歴職歴の詳細は不明であるが、民友社での活動歴がある。1907（明治40）年にイソップ物語の訳本を、1910（明治43）年にはアンデルセン童話の「真珠の飾りひも」の訳を、1908（明治41）年には能楽大辞典を正田章次郎と共著で吉川弘文館から出している。能楽や川柳にだけでなく、阿倍仲麻呂、滝沢馬琴、大石良雄など歴史上の人物に関する著作や小説も多い。非常に多彩で、「大火」という探偵小説も1893（明治26）年に正文館から出版している⁴⁶。

10) ⑩ 1909（明治42）年9月 K. T. 生（高橋一知）訳注 モエガラ娘の話（Cinderella）『英學界』P

(1) 邦訳の概要

この訳は『英學界』（*THE YOUTH'S COMPANION FOR THE STUDY OF ENGLISH*）第7巻20号に収録されたもので、「CINDERELLA モエガラ娘の話」I, II という題名で、英語の後に日本語訳を併記し、英語の訳注も入れたテキスト風のものである。

後妻と継娘たちが、実の娘にボロを着せて朝から晩まで拭き掃除や皿洗いをさせる。寒いのでモエガラのある爐の傍で暖を取るので、モエガラ娘とあだ名をつけられる。王が皇太子のために舞踏会を開催し、市民の婦人を全員招待する。モエガラ娘は自分だけ置き去りにされて泣いていると、仙人の教母（godmother）が現われ、南瓜と溝鼠と蜥蜴を鞭で叩いて、馬車と馬と馱者に変身させる。魔法の杖でモエガラ娘をなでて、立派な衣服と美しいガラスの上靴を身につけた姿に変身させる。12時までに帰る約束をさせ宮殿へ送り出す。王子自身が出迎えて舞踏室へ案内し、娘と共にダンスをする。12時15分前に娘は挨拶して王宮を去る。2回目は、前よりきれいな衣装で娘は出かける。王子とダンスをして時を忘れ、12時1分前に慌てて城を去る。

「通常 supper は午後十時頃にて supper には種々あり婦人達は牛乳や cocoa を飲みて biscuits の類を食ひ男子は大抵 whisky and soda を飲む cheese と biscuits を食ふて beer を飲む人もあり此れも都合上 Dinner を晝食とする人は午後七時より八時頃までに supper を食ふのである。此場合は lunch（晝飯）と内容同じ。」〔訳者註〕

Cinderella は慌てて立ち去るが、走っている最中に12時になる。その途端魔法が解けて、元のモエガラ娘になる。片方の靴を落として、追いかけてきた王子に拾われる。王子はこの靴の所有者と結婚すると布告して、町中の婦人に靴合わせをする。モエガラ娘が試すとうまく合う。彼女がもう片方の靴を取り出すと、教母が現われ宝棒でなでる。彼女は直ちに美しい王女（princess）になる。継姉たちは驚いて Cinderella の足元に身を投げ出して無礼を詫げる。彼女はそれを快く受け入れる。彼女は王子と結婚し「琴瑟相和して永く楽しんだめでたし々々々。」

(2) 邦訳の分析

学生の英語学習のための雑誌に収録された英語と日本語併記のものであるので、随所に英語が混じる文章である。シンデレラはモエガラ娘と訳され、godmother を正しく教母と訳している。

単なる仙人や妖精でなく、後見人の意味を持つ名付け親、教母、代母と訳しているのは、英語圏の風習を理解している人ならではの訳語といえる。原文にはない dinner、supper、lunch の説明や食材の詳細な描写から、英語圏の食生活を若者に伝えようとする意図が読み取れる。一方、漢文調の文章「琴瑟相和して」なども混入されており、「詩経」などの漢文に対する造詣の深さも読み取れる。モエガラ娘はペロー版同様、2人の継姉を許すが、宮中に招いて結婚相手の世話まですることはない。また、グリム版のように報復もしない。結婚して幸せになった場面で終わる。

(3) 底本 英文併記であるので、底本を探す必要はない。

(4) 邦訳者

訳者は K.T. とのみ記され、これまで不明とされていた。調査の結果、^{たかはしかずとも}高橋一知(1862-没年不明)であると推測する。高橋は「米國に遊學しミシガン大學を卒業し在留十餘年の後歸朝しシヤパン、タイムス社に入る現に同社の記者にして又慶應義塾に教鞭を執る」と大正4年1月の人事興信録(第4版761頁)に記載されている⁴⁷。米國に長期滞在した人にしかわからない情報が加筆された邦訳といえる。

11) ⑩ 1909(明治42)年9月 谷東百合雄「シンデレラと硝子の上靴」『教授資料』7巻9号
教材研究会 P

(1) 邦訳の概要

「昔ある處に、三人の姉妹が居りました。」ふたりの姉は派手で、美しい着物を着ており、家事はすべて妹に押し付け、妹をシンデレラと呼ぶ。王が皇太子の成年を祝って舞踏会を開く。姉たちだけが舞踏会に行き、妹は行くことができない。爐の傍で泣いていると、守神が現われ、魔杖で触れると汚れた古い着物は「極めて美しい晴衣に變わり、髪は綺麗な花で飾られ、さうして足には硝子の上靴が穿かされて」いる。神は南瓜を薔薇色の緞子を張り詰めた立派な馬車に、6匹の小鼠は馬に、2匹の大鼠は馭者と馬丁に変身させる。12時までには帰って来る約束をして送り出す。シンデレラは夜中まで皇太子と踊り、12時までには帰宅する。翌週また御殿で舞踏会が開かれ、シンデレラも行く。皇太子と踊っていると楽しくて時を忘れ、12時になってしまう。彼女は驚いて飛び上がり、戸口の方に懸命に駆け出し、硝子の上靴を片方落してしまう。魔法が解けてしまい、彼女は古着姿で歩いて帰る。硝子の上靴を履くことが出来るものを妃にするという布告が出て、洛中の貴婦人が全員、靴合わせをする。シンデレラの家にも使者が来て、姉たちが靴合わせをするがうまく合わない。シンデレラが出てきて試着するとうまく合う。神が現われて、魔杖でシンデレラの体に触れると、美しい着物に変わる。姉たちは驚き、ひれ伏して詫げる。その日のうちに結婚式が行われ、王位が譲られて皇太子は王に、シンデレラは皇后になる。皇后は残酷な姉たちの罪を許し、「一家族のもの皆々楽しい一生を送」る。

(2) 邦訳の分析

シンデレラと姉たちは実子と継子という関係ではなく、3人姉妹という設定になっている。姉たちは派手で浪費家、妹は家事一切を引き受ける働き者である。彼女を助けるのは守護神で、魔

杖で望むものを出し、希望を叶えてくれる。硝子の上靴が足に合うや否や守護神が現われ、美しい姿に変身させてくれる。彼女が舞踏会で見た姫であるとわかり、姉たちは謝罪する。彼女は許して、姉たちも楽しい一生を送ることができるよう配慮する。ペロー版の筋書きを踏襲したものである。名前はシンデレラではなく、シンドラとされている。

教育研究会編の「教授資料」として訳出されたものであるので、読者は生徒ではなく、教員と想定する。これを教授資料として活用するか否かは各教員の判断に任されていると思われる。

(3) 底本 不明である。

(4) 邦訳者

訳者谷東百合雄は山口県師範学校教員と訳者名の上に明記されているが、詳細は不明である。

12) ⑫ 1909 (明治42) 年10月 久保田小塊文^{しょうかい} 辻村秋峰画^{あきみね}「シンデレーラ」『お伽絵解きこども』6巻8号 大阪 児童美育会 P

(1) 邦訳の概要

あるところに3人の「女」^{むすめ}がいて、1人の名をシンデレーラといい愛らしい子である。他の2人は後妻の連れ子で意地悪である。継母は連れ子にのみ美しい服を着せ、シンデレーラにはボロを着せ、台所仕事を押しつける。王が王子のため舞踏会を開催し、若い娘たちを招待する。姉たちは着飾って行くが、シンデレーラは行けない。泣いていると神さまが現われて杖を一振りする。南瓜が馬車に、鼠が馬になり、従者や馬丁も作りだし、シンデレーラも美しい装いに変身させて舞踏会に行かせてくれる。彼女は王子の目に留まる。時計が12時を打ったので、彼女は慌てて帰る。あまり急いだので、彼女は上靴を片方落としてしまう。王子はその上靴を拾い、多くの娘に履かせるが、小さすぎて誰にも合わない。姉たちも試みたが合わない。しかし、シンデレーラの足にはうまく合う。姉たちは驚き、美しい姫はシンデレーラであったと知ると、意地悪を詫びて善人になる。「シンデレーラ^{ママ}わ^{わかつの}王子と^{こんれい}婚禮^{すえなが}しまして^{さか}末長く^{めでた}栄えました。めでたし^め 目^で出度し^た」

(2) 邦訳の分析

まるで粗筋のような短い文章である。辻村秋峰^{あきみね}の挿絵が秀逸で、シンデレーラが階段で靴を落とす場面がカラーで大きく描かれている。靴はガラスの靴ではなく、黒いパンプスである。『お伽絵解きこども』と銘打つだけあって、絵を見てこどもが一目で状況を思い浮かべることが出来るように描かれている。

(3) 底本 不明である。

(4) 邦訳者

訳者久保田小塊^{しょうかい}の本名は久保田正吉（生没年不明）という。大阪朝日新聞社社員名簿（木崎愛吉編1904-1905年出版の名簿）に名前があるので、画家辻村秋峰とともに同新聞社の社員であったことがわかる⁴⁸。1904（明治37）年2月大阪に児童美育会を発足し、日本最初の絵雑誌『お伽絵解きこども』を辻村と共に発行する。

画家辻村秋峰^{あきみね}の本名は辻村又男（1871-1948）である。彼は堺市で生まれ、筒井年峰に絵画の

手ほどきを受ける。『お伽絵解こども』では挿絵画家として活躍する。辻村は1923年12月から「コードモアサヒ」の編集を担当し、朝日新聞社会事業団の次長として子ども博覧会や農業期託児所助成など、少年保護事業に尽力する⁴⁹。

第4章 明治期の邦訳内容の分析結果

1. 邦訳12話の内容分析表【表3】

表示記号の説明：A 実母の臨終 B 父の身分 C 娘のあだ名 D 父の土産 E 救済者 F 南瓜の馬車等の出現の有無と道具 G 魔法の服 H 魔法の靴 I 門限 J 王子の送迎 K 父の登場 L 落とす靴の左右 M タール塗布 N 靴の持参者 O 姉の靴合わせ P 人違いを指摘するもの Q 父親の悪評価 R 見つけ出す人 S 結婚後の身分 T 継姉へ態度 U G 版か P 版かの表示

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
A		母が見守る		草葉の蔭で見守る		風邪で死ぬ						
B	死亡	豊かな商人	富貴紳士	富豪			商家	豪い人				
C	新貞羅	おすす	シンドラー	シンドレラ	燻娘	孝行娘	おしん	真珠姫	シンドレラ	モエガラ娘	シンダレラ	シンデレーラ
D		花一枝		樹の枝								
E	神女	白い鳩	亡母	白い鳥	仙女	女神	辨天様	白い鳩	女神	教母仙女	守護神	神
F	はこ櫃 目を閉じる		有鞭杖		有鞭	有鞭	有扇		有寶棒	有魔法の杖	有魔杖	有杖
G	紫の繻子	錦の小袖	金銀の衣服	金銀の衣服	金銀宝玉の服	見事な着物	絹の着物	金銀宝石の服	金糸と玉の着物	立派な服	美しい晴衣	美しい装い
H	絹	金銀	ガラス	金	ガラス	びいどろ硝子	扇の模様	金	琉璃	ガラス	硝子	
I	12時		12時		12時	12時	6時		12時	12時	12時	12時
J				有								
K				有								
L	右	片方	半足	左	片方	片方		片方	片方	片方	片方	片方
M				瀝青								
N	家来	家来	家来	太子	家来	王	家来	王	家来	王子	家来	家来

O	不適合	足切断	不適合	足切断	不適合	足切断		足切断	不適合	不適合	不適合	不適合
P		2羽の白い鳩		2羽の小鳩								
Q				有								
R	家来	家来	皇子	太子	家来	王	華族	王	王子	王子	王	王子
S	公子貴妃	公子妃	皇子妃	太子妃	公達花嫁	后	妻	后	后	后	皇后	后
T			許す	盲目になる	許し結婚斡旋				許す	許す	許す	許す
U	P	G	P	G	P	P	P	G	P	P	P	P

2. 【表3】の分析結果

娘の呼び名は日本化されたものが7話（新貞羅①おすす②燻娘⑤孝行娘⑥おしん⑦真珠姫⑧モエガラ娘⑩）、西洋化されたものが5話（シンドラー③シンドレラ④⑨シンダレラ⑪シンデレーラ⑫）で、明治期の邦訳では日本化されたものの方が多い。

実母が臨終の床に娘を呼び、天から見守るという言葉（グリム版に収録）が邦訳されているのは2話②④のみである。グリム版ではこの母の守護神が白い鳩を送って娘の窮地を救う②④⑧。真珠姫⑧では、母の死は語られるが、母の臨終の言葉が省略されている。しかし、娘が墓参りをすると、2匹の白鳩がそばの木に来て見守り、娘の願いを叶えてくれる。グリム版では亡き母が守護神として実子を見守り、窮地を救ってくれる。一方ペロー版では実母ではなく、名付け親（教母）が妖精であり、鞭⑤⑥や杖⑩⑪⑫で南瓜や鼠や蜥蜴を馬車や馬や従僕に変身させて実子を舞踏会に行かせてくれる。変身させる道具が扇⑦や宝棒⑨であったり、変身させる人が代母ではなく亡母③であったりもする。女神や神だけでなく日本的な弁天様⑦まで出現する。面白いのは変身させるのではなく衣装箱①を運んできて着替えさせ、目を閉じている間に彼女を宮殿に送り届ける神女①が出現することである。

衣装が和服の着物は5話①②⑥⑦⑨あり、紫の繻子、錦の小袖、見事な着物、絹の着物、金糸と銀糸の着物などを着用する。洋服は7話③④⑤⑧⑩⑪⑫あり、金銀の衣装、金銀宝玉の衣装、金銀宝石の衣装、立派な服、美しい晴れ着などである。

落とす靴の素材は、ガラスが最も多く6話③⑤⑥⑨⑩⑪で、金が2話④⑧、玉が1話②、絹が1話①である。なかには靴ではなく、扇を落とすものも1話⑦存在する。落とす靴の左右が明記されているのは2話で、グリム版と同じ左は1話④で、右が1話①、後の9話はすべて片方という表記である。

門限の設定が夜中12時のものは8話①③⑤⑥⑨⑩⑪⑫で、夕方6時が1話⑦、ないものが3話②④⑧である。門限はペロー版にあり、グリム版にないので、基づいた版を反映したものになっている。ただ、1話だけペロー版に基づいているのに、門限が夕方6時に設定されている話がある。国語教科書に収録された「おしん物語」⑦である。おそらく教育上の理由で夜中から夕方に変更されたのであろう。

ペロー版の父親は影が薄く、言及されていないものが6話⑤⑥⑨⑩⑪⑫もある。なかには死んだことにされている話①もある。一方、グリム版の父親は実子に対して残酷な人として登場する。娘が鳩小屋に飛び込んだり、梨の木に登ったりしたと聞くと、斧で小屋や木を躊躇なく切り倒す人である。実の娘が怪我をする可能性が高いことを考えると、家庭内暴力と解釈されかねない行動である。邦訳でこの部分を訳出しているのは④のみである。

靴合わせに来る人物は家来が8話①②③⑤⑦⑨⑪⑫で、王子が4話④⑥⑧⑩である。グリム版は王子が来るので2話④⑧は理解できるが、後の2話はペロー版であるのに、王子自らが来ると改変されている。姉たちが靴に入れるため足を切断するグリム版の描写は4話②④⑥⑧にあり、英国版と明記している増田訳⑥にも見られる。

いじめた継姉に対するシンデレラの態度は、継姉が謝罪したので許す、というものが大多数である。鳩が2人の継姉の両眼を突き出すという「眼球除去」の刑罰を与えるのは1話もなく、「二姉は悪事の罰として、^{めしい}盲となれり」という表現が1話⑧に存在するのみである。主人公による復讐ではなく、神の裁きであるという表現に和らげられて挿入されている。これはウェーナート版の表現 (the two sisters were smitten with blindness as a punishment for their wickedness) と同じである⁵⁰。西口も指摘しているように⁵¹、この改変は澁江によるものではなく、底本である英語訳によるものなのである。

明治期に邦訳された「シンデレラ」は12話中9話がペロー版で、3話がグリム版の話である。最初に紹介されたのが新聞紙上で、ペロー版であったことが一因といえよう。

ペロー版が普及した理由は、なによりもまず、ファンタジックな要素が多いからであろう。南瓜の馬車、鼠の馬、蜥蜴の従僕など、妖精が杖を振り上げる度に、瞬く間に変身する面白さや、ガラスの靴の繊細な美しさと輝き、その靴を履けるのが汚い服を着て不当な扱いを受けている娘であること、その娘が最後には王子の后になり、継姉たちが許しを請うという胸のすくストーリー展開が読む人を引き付けるのであろう。シンデレラが報復をせず、許すというのも、勧善懲悪の昔話に慣れた日本人にとって、新鮮な香りがする話と感じられたのではないだろうか。出現するドレスや靴の美しさも女の子にとって魅力的な要素といえる。

一方、グリム版は西洋昔話の泥臭さがそのまま混入された話である。魔法が出るのではなく、亡母が守護神として実子を守る話である。灰かぶりと呼ばれるこの娘は、頭脳明晰、運動神経抜群、ダンス能力抜群、服装のセンス抜群という優しさと忍耐力を兼ね備えたスーパー女子である。父の帽子(権力象徴)を落とした榛の枝を要求するなど、慣習法にも詳しい女の子が、亡き母の遺産譲渡を意味するメタファーを駆使して美しく身を飾り、ダンスパーティーに参加し、王子を

虜にさせて逃げ去る神秘的な娘である。金の靴という多くのメタファーを持つアイテムだけを残して、逃げ去る娘は確かに魅力的な存在である。しかし、継姉たちが靴合わせのため足の一部を切り取ったり、悪事の報いとして鳩に目を突かれたりする場面は、残酷と受け取られて、普及しなかった理由の一因と考えられる。

ところで、この話は「サンドリヨン」でも「灰かぶり」でもなく、「シンデレラ」という英語名で普及している。一体、なぜなのだろう。三宅興子は、ペロー版（1697）が、「最初にイギリスで英訳されたのは「一七二九年で、『サンドリオン』を灰の cinder に—ella をつけて英語名らしくし、それが定着したのである」と主張している⁵²。絵本先進国であるイギリスで、18世紀には廉価なチャップブックという形で、外国昔話である「シンデレラ」が普及したのである⁵³。フランス語名でもドイツ語名でもなく、「シンデレラ」という英語名で、まるで「英国昔話」であるかのように普及したのは、産業革命により印刷機が発達し、真っ先に絵本市場が確立したのが英国だったからであろう。明治期の邦訳でも3話①③⑥で英国の話という記載があるのは、上記のような理由からであろう。

結論

明治期の邦訳12話のなかで、最も大幅な改変が加えられていたのは、高等小学校用『国語読本 巻一』に収録された「おしん物語」⑦である。文学博士坪内逍遙著と記載されている。訳者ではなく、著者とされているのは、改変の度合いの強さを物語るものといえよう。落とす物が靴ではなく、扇になり、その図柄を当てるのが課題となる。弁天様がおしんを華族の園遊会に行かせてくれるが、彼女は靴ではなく扇を落とす。おしんが華族の嫁になれるのは、扇の図柄を当てただけでなく、2回目の園遊会への参加を辞退したからである。理由は継姉のおこまが悔しがるからと、夕方6時の帰宅が危ぶまれるからである。他人への思いやりと、規則順守に対する強い意志が評価され、弁天様が褒美として華族の家に嫁がせてくれるのである。また、おしんの魅力は美貌ではなく「立ち居振る舞い言葉使いまで上品」であることとされている。まるで修身の教科書であるかのような大胆な改変が施されているのである。ようするに教科書版になると、教育的意図で自由に改変されたものが出現するということなのである。

グリム版に1番忠実な訳は、澁江保の「シンドレラ嬢奇談」④である。墓前に植えた榛の木に祈願すると白い鳩が金銀の服と金の靴を落としてくれる。会場から帰ろうとすると、送ると言う王子を振り切るため彼女は鳩小屋に飛び込んだり、梨の木に飛びついたりする。鳩小屋や木を切り倒す残酷な父親の登場や、追いつけないのでタールを塗って引き留めようとする姑息な王子の姿まで忠実に訳出されている。

ペロー版に1番忠実な訳は、井上寛一の「燻娘」⑤である。父が母の尻にひかれていることも、「よろずただはしだい萬只母次第」と表現し、公達と結婚した燻娘は姉妹を宮中に迎え大諸侯に嫁がせてやる。悪行を詫びた姉妹を許すだけでなく、結婚相手まで世話してやるというペロー版の内容が忠実に訳出されているのは、井上訳のみである。また、大切なのは心様の優れていることであるという解

説も、ペロー版に基づいたものである。

明治期に訳された12話の「シンデレラ」は、日本化されているものも多いが、できるだけ原文に添おうとするものも存在する。シンデレラが舞踏会に行くのが1回であるのは3話しかなく、ペロー版が2話⑦⑫で、グリム版が1話⑧である。後はグリム版の原文どおりの3回が1話②で、ペロー版の原文通りの2回が8話①③④⑤⑥⑨⑩⑪である。

明治期の邦訳は媒体が新聞や教科書になると、改変箇所が多くなるが、雑誌や書籍になると忠実な内容のものも出現する。邦訳はすべて英訳からの重訳なので、底本である英訳本における改変が踏襲されているものが少なくない。今後の課題は、底本である英訳本を確定して、そこでの改変を詳しく調査し、それを踏まえただうえで、日本的改変とは何かを正しく把握することである。

(2023年10月2日受理)

(のぐち よしこ 研究員)

注

- ¹ なぜガラスの靴なのかについての論考は拙著を参照。『グリム童話のメタファー』勁草書房、2016年、74-75頁。
- ² なぜグリム兄弟は昼間開催に変更したのかの理由については同上の拙著、75-76頁参照。
- ³ なぜ父親が残酷なのかについては同上の拙著、77-78頁参照。
- ⁴ Yoshiko Noguchi. *Rezeption der Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. . Dissertation Maruburg 1977. 62-92.
- ⁵ ②③④⑧の番号は【表2】明治期の邦訳表の番号である。
- ⁶ 拙著『グリムのメルヒェン—その夢と現実』勁草書房、1994年、112-135頁。付属資料7-12頁。
- ⁷ 川戸道昭／野口芳子／榎原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』2000年、ナダ出版センター、2000年、225-226頁。
- ⁸ 榎屋仁奈「日本におけるシンデレラの改変—明治期から1960年代までを中心に—」日本ジェンダー学会『日本ジェンダー研究』第6号、2003年、41-54頁。
- ⁹ 川戸道昭「明治期の『シンデレラ』と『赤ずきん』」川戸道昭／榎原貴教共編『児童文学翻訳作品総覧』第3巻、2005年、9-43頁。
- ¹⁰ 同上、「新発掘された『新貞羅』全文紹介」、115-123頁。
- ¹¹ 同上 144-158。
- ¹² 川戸道昭／榎原貴教共編『児童文学翻訳作品総覧』第4巻、2005年、589-591頁。
- ¹³ 拙著「英訳本から重訳された日本のグリム童話」、川戸道昭／榎原貴教共編『児童文学翻訳作品総覧』第4巻、465-485頁。
- ¹⁴ 川戸道昭「明治期の『シンデレラ』と『赤ずきん』」、川戸道昭／榎原貴教共編『児童文学翻訳作品総覧』第3巻、2005年、34頁。

- 15 国立国会図書館『近代日本人の肖像』、<https://www.ndl.go.jp/portrait/> 閲覧日：2023年9月10日。
- 16 榛の若枝（Haselreis）が持つ法的メタファーについては拙著 前掲（注1）70頁参照。
- 17 実名回避の慣習は古代や中世の社会ではかなり広範囲に見られた。日本でも紫式部、清少納言などは父の職名などに因む「^{そうろうな}候名」で称され、実名は不明のままである。詳細に関して下記拙論を参照。「グリム童話『ルンベルシュティルトツヒェン』の明治期から大正期の翻訳」『梅花児童文学』第29号、2022年、30頁。
- 18 改変の理由は冒瀆令（Blasphemy Act）である。拙著 前掲（注13）479-480頁参照。
- 19 本名は菅^{すが}であり管^{すげ}ではないという指摘が孫の菅一氏から手紙でなされた。詳細は以下参照、拙著 前掲（注6）181頁。
- 20 同上、115頁。
- 21 寺澤巖男「児童・少年期に於ける讀物の重要性」『教育學研究』11巻6号、1942年、426頁。
- 22 浅岡邦雄「明治期博文館の児童向け出版物のめざしたもの」＜ラウンドテーブル＞『児童文学学会報告』⑦、「明治期児童出版の雄、博文館」2015年11月15日作成サイト。<https://nekopapaan.fc2.net/blog-entry-1012.html> 閲覧日：2023年9月23日。
- 23 1891（明治24）年7月『尋常小学 幼年雑誌』に愛柳子の筆名で訳出した「^{おうごん}黄金のわら」は、KHM55「ルンベルシュティルトツヒェン」の訳でウェーナート（E. H. Wehnert 1813-1868）の英訳版の表現、“His right came off in the struggle, and he hopped away howling terribly”と同じ内容が含まれていることを右記拙論で指摘。拙論 前掲（注17）23頁参照。
- 24 榛の枝が持つ法的メタファーについては拙著 前掲（注1）70頁参照。
- 25 グリム原典の初版では「片方の靴」であったが、第2版から「左の靴」に改変される。左の靴が脱げる女は出産可能という伝承文学がある。詳細は拙著 前掲（注1）73頁参照。
- 26 この点については西口拓子もその著書で指摘している『挿絵でよみとくグリム童話』早稲田大学出版部、2022年、81頁。
- 27 この本には英訳者名が記載されておらず、挿し絵画家の名前 Wehnert しか書かれていないので、本論ではウェーナート版と称する。他の研究者（西口拓子、注26、87頁）も同様の書き方をしている。
- 28 詳細は右記拙論に詳述。拙論「『シンデレラ』の固定観念を覆す—ジェンダー学的視点からのグリム童話解釈—」『武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）』第58号、2010年、9頁。
- 29 拙著 前掲（注1）、79頁。
- 30 西口拓子、前掲（注26）、110-115頁。
- 31 稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂、1977年、879頁。
- 32 西口拓子、前掲（注26）、110-113頁。
- 33 村岡巧「澁江保の事蹟」、森鷗外記念会編『鷗外』第72号、森鷗外記念会、2003年、1-30頁。

-
- ³⁴ 新倉朗子訳『完訳 ペロ－童話集』岩波書店、1982年、223頁。
今野一雄訳『ペロ－の昔ばなし』白水社、1984年、141頁。
- ³⁵ 岡田知子「La Bella au bois dormant の日本における受容—『西洋仙郷奇談』「睡美人」を中心に」梅花女子大学大学院修士論文、2015年、31頁。
- ³⁶ 同上、31-32頁。
- ³⁷ 同上。
- ³⁸ 川戸道昭「図説日本の外国児童文学」『図説児童文学翻訳大事典 第1巻』所収、大空社、ナダ出版センター、2007年、56頁。
- ³⁹ 井上寛一等編、矢野竜溪関正『内外百事便覧 明治21年』報知社、1888-1889(明治21-22)年。
- ⁴⁰ ブリタニカ・ジャパン編著『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』ロゴヴィスタ2007年。
<https://kotobank.jp/> 閲覧日：2023年9月23日
- ⁴¹ 白雨楼主人(増田丘一)『きむすめ論』神田書房、1913年(再版)に筆名の後に実名が添えられているので、実名を確定することができた。
- ⁴² 国立国会図書館』サーチ機能に、増田丘一を入力して、その著書を検索した。
- ⁴³ 『20世紀日本人名事典 そ〜わ』日外アソシエーツ、2004年、1664頁。
- ⁴⁴ 西口拓子、前掲(注26)、10-115頁。
- ⁴⁵ 三島憲之「和田垣謙三と明治・大正期の経済学界(1) 和田垣の経歴と活動を中心に」『東北公益文科大学総合研究論集 forum21』2002年、27-40頁。
- ⁴⁶ 『国立国会図書館』サーチ機能に、雨谷幹一を入力して、その著書を検索した。
- ⁴⁷ <https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-5467> 閲覧日：2023年9月23日
- ⁴⁸ 木崎愛吉編『大阪朝日新聞社社員名簿』好尚堂1905年。
- ⁴⁹ 日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍1988年479頁。
- ⁵⁰ *Household Stories* : Collected by the Brothers Grimm: Newly Translated with Two Hundred and Forty Illustrations by E. H. Wehnert. New Edition. London 1861. 81.
- ⁵¹ 西口拓子 前掲(注26) 81頁。
- ⁵² 三宅興子『イギリスの絵本の歴史』翰林書房、2019年、97頁。
- ⁵³ 同上、23-29頁

